



教員が研究の楽しさを語る

第298回(10/29)東島 仁先生推薦 ブックガイド



※掲載されている本はN棟3階 あかりんアワーのコーナーに配架されます。

Book1

市民科学のすすめ：「自分ごと」「みんなごと」で科学・教育・社会を変える

著者：小堀洋美著

出版：文一総合出版, 2022.4

コメント：日本を含む世界のいたるところで、様々な研究開発の門戸を社会に開く動きが進んでいます。市民科学は、その代表です。医学・生命科学領域では（元・潜在的を含む）患者をめぐる人々に照準を合わせがちですが、本書は、広く様々な分野における参画の形（協働型、協創型あるいはデータ収集型など）を豊富な具体例とともに紹介しています。

[この本を読む→https://opac.ll.chiba-u.jp/opac/opac_link/bibid/FB10117600](https://opac.ll.chiba-u.jp/opac/opac_link/bibid/FB10117600)

Book2

Silent partners : human subjects and research ethics

著者：Rebecca Dresser

出版：Oxford University Press, c2017

コメント：最先端の医学・生命科学領域で、「研究への患者・市民参画」が重視された背景には、研究倫理上の課題が軽減されること、そして、病気とともにある人々の経験がより良い未来づくりに生かされることへの強い期待があります。本書は、研究開発さらには研究開発をめぐる政策決定において、患者・市民の視点の重要性をひしひしと感じさせる一冊です。

[この本を読む→https://opac.ll.chiba-u.jp/opac/opac_link/bibid/FB10134850](https://opac.ll.chiba-u.jp/opac/opac_link/bibid/FB10134850)

Book3

みんなの研究倫理入門：臨床研究になぜこんな面倒な手続きが必要なのか

著者：田代志門著

出版：医学書院, 2020.12

コメント：研究倫理という言葉で、研究の本質に直接かわりのない厄介な手続き面の問題が思い浮かぶ方には、本書を強くお勧めします。医療現場で、どのように研究倫理のルールに向き合えばいいのかを、研究倫理上のやっかいな課題を、優雅に軽やかに解決する研究倫理の第一人者（の一人）が、読みやすく、かつ学術的に極めてしっかりと解説した良書です。

[この本を読む→https://opac.ll.chiba-u.jp/opac/opac_link/bibid/FB10101976](https://opac.ll.chiba-u.jp/opac/opac_link/bibid/FB10101976)

